

ば即ち一國の元氣となり一國の元氣振作すれば兵氣旺盛にして武力自から強大なり是れ我國東海の表に屹立して古より克く宇内萬邦を雄視する所以なり

二十七八年の役克く寡兵を以て衆虜を制し克く小國を以て大國を伏する所以のものは亦我元氣の振作に職由せずむばあらず此の戰勝國の餘威を保維し皇國民の本領を克終するの道、蓋し元氣振作の外なきなり元氣を振作せむと欲せば神を祭り誠を誨ゆるに如くもの莫し

曾參曰へり反己而縮雖千萬人吾往矣と縮は誠なり一人誠なれば千萬人の勁敵も畏るゝに足らざるなり若し一村其誠を得、一國其誠に化するに於ては列強の大、我に於て何か有らむ明鑑遠きにあらざ征清の役其證を示す

夫れ神を祭るは誠を誨ゆるの法耶易に曰く觀盥而不薦有孚颙若と言心は下觀て化するなり化して之を誠にすれば即ち元氣振作す是れ必然の理なりとす

本年七月埼玉縣人藤間、飯野、小熊の諸氏發起と爲り左に列記する志士の義財を醴集し八坂神社神輿を北埼玉郡騎西町字下崎寶光寺の境内に新設す克く時宜を得たりと謂ふべし

抑そも八阪の神は素盞鳴尊を崇祀せしものなり素尊武を以て草昧を經略し給ひしは後人の夙に景仰する所たり我國武成の今日、祭るに八阪の神を以てす誠を誨ゆるの法、是に於てか章に元氣振作の道、是に於てか著し

我れ元氣の振縮は國運の消長に關するや大なるを想ひ殊に神輿新設の始め其當路者の請に應じ持説を敘述すること爾り

忍ふ草

(わが祖父君花守翁の例祭つかへまつりて)

一
臨ゆく駒のあしはやく
八重の汐路も夢うつゝ
おのれが三つの時なりき
あしきを嬌めてよしといふ
さかゆる庭に移りすみ

二

子よりも孫の響へかや
めぐしさいひてき抱き

今はむかしとなるみ濁
はいの乳房に顛りてし
浪華にまぜる祖父君の
よの人々をなしへ草
おきふしやすく過しけり
わが祖父君はわれを愛めて
いつくしきては撫でますり

文讀むしなり手習ひの
飽かてなしへつ秋の夜の
唐やまさの物語り

三

「積さの道のまがみちに
神の御前の人みな
軒端におふる御竹の
正しき人さあふかれよ」
その言の葉の忘れず

四

さわる孫のそのなかに
世にありかたきあふせ言
おのれ五つとなりし頃
何某かたにひらかるゝ
われを伴なひ玉ひつゝ

五

あまたの大人のそのなかに
しめしたまひつほのめかし
こなき老のたのしみと
なまはりぬれば吾れもまた
次のつごひをまち詫ひつ

六

實にや月日に關守も
やがて吾妻に上りては
はげめはすゝむ學ひ藝

術も手づからはるの日を
ながくし夜はむかし今
くさくさかせ給ひつゝ

ふみな迷ひそ誠こそ
行くべき道を汝もまた
直なる節におひ立て
こそ細やかに説きたまふ
骨に刻みて消えなくに

吾れのみかくさおもふまで
いよいよそしみ動みつゝ
今宵はいづこあすはまた
書櫃のつごひの度こそに
ものなまかせ給ひけり

わがいさげなき鳥の跡
若しほめそやす人あれば
よろこびたまひ物あまた
おさな心にうれしくて
ますゝはげみ動しみな

なにはの里に三させすぎ
學ひの校にかゝふ身
十まり三ツさいふ年に

小學の業をへにけり
唐やまさな男女の道

七

斯かりし程もぢい君は
吾れをばなほもいつくしみ
なしへ導きたまひしを
露ばかりだにむくひてし
せなにつめたき汗なかれ

八

富士の高峯のふたつなき
いそしみつさめ給ひつる
風極やにあきらけく
松の常磐の動きなき
雲の上まで聞え上げ

九

斯くてなり／＼おのれらは
かなりななほも傳へんぞ
九十九折なる山路をも
渡りつ越えつ國々を
神のすぐ道すゝめつゝ

十

いさげなきより父上は
われはひさへにぢい君や
やしなはれつゝ生立ぬ
なでし子もなぬやもめさて

いさみてわれはこれよりも
學の林にわけ入りぬ

むかしなかに疾ましげに
はこみたまひかにかくと
思へは深き御めぐみの
こどもなき身の恥しく
映はひたさぞうち漏る

誠の道はぢい君の
しるし著けく四方の海
治まる御代にあひおひの
神の數の一團と
つかさの職をたまはりぬ

なしへ給ひし言の葉の
あるは東に或は西
逆巻波の舟路をも
へめぐりありきふたつなき
意りさてはあらさき

旅路はるかに住みたまひ
叔父君さては伯母上に
別けてひさりの伯母上は
我身にわれを引受て

心つかひもなかりに

十一

我にあまたのいもさあり
我とおなしくちい君の
愛でいつくしみ育くまれ
妾たちもよのつねに
物學ひにもうさからず

十二

寄る年波のたちまちに
わが祖父君はなほいまだ
われも今年は十九さいふ
いまは浮世の嵐風に
おぼるけながら行すゑの

十三

墨田の堤ばきのふけふ
さだめなき世の有様や
こゝろ長閑き春の日も
親にもまさる御めぐみの
うちふしまして葉櫻の

十四

秋風そよそそのさしも
俗しきやどば一入に
またふりかゝる憂き世かも
鶴さは名のみいもうさも
床に名残の一聲や

めでいつくしみたまひけり

その年輩の一人こそ
愛児となりつ諸共に
いさもすなほに大人しう

すぐれこそせれ劣らずて
その名をつるさぞ呼ひにける

八十路の坂をこえまして

いさすこやにおはしけり
はたちになかき身となりつ
吹きさそはれてそこはかさ
こさもおもひわつらひぬ

花のさかりもあすか川
にぎはひ遊ぶ人皆の
うちこもりつけふ幾日
重きやまひに伯母上は
嵐にもろくも散りたまふ

暮れ行く庭の冬木立
寒けき袖に露時雨
千年経よとておはせける
ながいらぬ日をいたづきの
天々御空に分け入りぬ

十五

わが悲しみはそいかに
わかいへのみは花咲かす
わが身一とつに集めつゝ
おなご歎きにしつむなる
さすが身もよあらすてや

十六

親ある子らは子こゝろに
子をおもふ開ひたぶるに
いのちのものをさてなきものを
すさひに荒ふわが庭に
むかしながらに幾させか

十七

十年は惜しき命ぞ
その年くれて明けぬれば
千ふろづ人のまぢあかし
ひらくる御代さぞなりにける
かりそめならで祖父君は

十八

遠き縣におほやけの
やまひの名残さりやらぬ
肩をちからに遙々
明暮みどりかしつきつ
なだる醫師つどへても

十九

この一とせは春くれど
秋暮れ冬の淋しさな
消えも入らまく打賭びぬ
うからの中に祖父君の
傷ましげにそ見え給ふ

いさし子もてる親々は
命長かれ千代ませと
かくつれもなき夜嵐の
のこる老木の松はいま
千年の妾たもつらむ

のたまひけんもはやいつか
明治二十まり三とせとて
焦れ暮せし「國會」の
春過ぎ夏の初めより
枕はなれすなりたまふ

つさめしませる叔父君も
おもきからだを叔母上の
のぼり來まして枕邊に
あらゆる手に手おほかたの
つゆおこたりの色見へす

きのふのあらし一わたり
立木にさわぐ蟬の聲
雨ふ頃やむら雲の
やうて一むら白雲の
姿をつゝみ西の方

二十

高く尊さき皇國の
岩根もかたき富士の峯は
さまりませる御山ぞさ
うけつ傳へつ祖父君の
春秋くれてまた君も

二十一

みたまは幾世を照らせきも
われちやからの悲しみは
親さいつく數へ子の
いかになげかひ惜みけん
葬送のいやわざ事へけり

二十二

伯父君あさなうけたまひ
いよまここの道の花
かんばしき香をおくりつゝ
たいしきおきて 天皇の
醜のから草なひけつる

二十三

千代のすみかさおく墓を

過てあれにし庭もせの
小田の蛙もかなしげに
又もわが家をおほひつゝ
下りて見るまに祖父君の
ふとの峯高く消え失せぬ

二十四

國の鎮の神やまど
天津御神の分魂
道のみ祖のなしへ草
こゝに幾世そ三百年の
もとのみやまにいらたまふ

二十五

現し世になきおん姿
さらにもいはす國々の
幾万てふ人びとは
霞にくもに集ひ來つ
おのゝ赤きまこもて

讀書漫錄

天山居士

●草鞋三足の賞賜

今の樞密顧問官副島種臣伯の遠祖某、豊公征韓の役に
従事し、咸鏡道吉林に於て攻城百餘日に及び、其の功
勳群を振きたるものゝ一人なりしが、後日の賞賜は實

いしぶみ高く苦むして
國の行すみそなはず
咲やたまはんわが道は
かくも譽れをあけけるな

二十四

ア、祖父君の神みたま
よろこびのみはあらずして
おさなきよりもかきいたき
めでいつくしみたまひつる
れぶりもやらで見たまふと

二十五

あらしき浮世の浪風に
いまは越路に流れ寄り
むくはんすべもしら妙の
ひさりむかしを忍ふ草
さみしさましぬア、何時か

わが祖父君は道の爲
こゝろのまなご鏡にも
かくもさかりぬ我國は
みそなはずらん咲ましげに

まこと嬉しみおぼすかや
つれなきものぞ浮世なる
掌の玉ものかはと
我身の今をかくり世に
おもへばわればいかにせん

たいよひけるも幾年ぞ
功もたてす御めくみに
雪の白山あふきつゝ
なみたは野の玉氷に
晴れて雲井に月を見む
(なほり)